

デューイ教育哲学の形成と原理 (7)

——科学信仰と新論理学の展開——

小柳正司*

(1993年9月30日 受理)

The Early Developments of John Dewey's Philosophy of Education and Its Underlying Principles

——His Faith in Science and "The Newer Logic"——

Masashi KOYANAGI

はじめに

われわれは、これまで前後10年にわたるミシガン時代のデューイの思想展開を考察する中で、彼の哲学の中心的な課題が「宗教と科学」あるいは「道徳と科学」を統一的に説明することにあったことを見た。それは、基本的には、進化論と諸科学の発展に伴う伝統的なキリスト教信仰の衰退、さらには巨大な産業社会の出現と地域共同体の解体という歴史状況の中で、人間の生き方を支える新たな精神的拠り点を模索する試みであった。

ミシガン前期のデューイは、この課題に有神論的観念論の立場からアプローチしていた。すなわち、彼は、宇宙進化を物質現象の機械的な因果連関に解消するスペンサー流の物理的世界観に対抗して、自らはヘーゲル哲学に依拠しながら、宇宙を巨大な一個の有機的生命体として捉え、宇宙には何か根源的な意志作用というものがあって、それが諸現象を一つの目的（つまり生命の自己完成）に向けて相互内在的に結び合わせているとする有機的・目的論的世界観を展開した。彼は、前者の立場を「実在の物理的解釈」として退け、後者の立場を「実在の精神的解釈」あるいは「世界を理性の具現および知的意図の顕現と見なす解釈」と呼び、これは「キリスト教神学の教えと同一である」と主張した。¹⁾ こうして、デューイは進化論や科学主義がもたらす不可知論あるいは懐疑論への防波堤を確保した。

だが、このような有機的・目的論的世界観は、同時に、伝統的なキリスト教神学の「神」概念に

* 鹿児島大学教育学部教育学科

対する決定的な変更を含んでいたことを見落とすべきではない。ここでは神はもはや彼岸に立つ超越的な存在者ではなくて、神は此岸の現実世界のうちに内在し、現実世界のあらゆる出来事を貫いて自らを顕現する「真理」そのものと見なされる。「神は常にわれわれの周囲にある。」²⁾かくして、神は此岸の現実世界のうちに引き降ろされ、神の意志は人間理性によって認識可能な対象とされる。これは、超越的な人格神の否定、そこからの人間理性の自立・解放を意味する。

科学と宗教、科学と道德との間の架橋は、このような文脈の中で可能とされる。なぜなら、科学は地上の現実世界のうちに内在する神の意志（真理）を、人間が自らの理性の力によって発見する営みとして意義づけられるものであり、科学は地上の現実世界のうちに神の意志を実現しようとする人間の意志的活動の一環として位置づけられるものだからである。

しかしながら、ミシガン前期のデューイにおいては、宗教と科学の調停は、経験科学が明らかにした諸事実を有神論の方向にいかにも矛盾なく説明するかという科学的諸事実の解釈の問題にとどまっていた。言い換えれば、科学は神の意志が世界に内在することを経験的諸事実を通して論証することに、その意義が認められていた。その典型は1887年の『心理学』である。この著書で、デューイは「心理学を科学的でアップ・ツー・デートなものにし、……この分野における科学的専門家たちの研究成果を反映させるように努力」しながら、生理学的・実験的心理学の多数の諸成果をヘーゲル哲学の有機的・目的論的解釈図式の中へと器用に織り込んで、最終的には「完全な人格ないし意志としての神が唯一の実在であり、人間のすべての活動の源泉である」という結論を導き出している。³⁾

これに対して、ミシガン後期に入ると、デューイは現実の科学の発展をそれ自体として是認するようになる。そして、彼は既成宗教に対する自らの訣別を表明するとともに、「祈りとは科学の探究である」とまで言い切る。⁴⁾もちろん、これは信仰の放棄を意味するものではない。ここでは、科学は神の意志（真理）を人々に直接啓示する唯一正統な媒体として位置づけられているのであり、宗教と科学の統一の問題は、宗教がこれまで人々の精神生活において果たしてきた機能を新たに科学の発展の中に「再構築」⁵⁾していく問題として捉え直されているのである。それは、科学を探究の方法として実生活の中に生かしていく態度の確立を意味しており、そうした生活態度をデューイは現代における真の信仰生活と考えるのである。

本稿は、ミシガン前期から後期へのデューイのこうした変化あるいは発展が、彼の思想形成上、どのような意味をもっていたのかを探ることを目的としている。中心的な論点は、デューイが「科学」というものをどのようなものとして捉えるようになったかという点に置かれる。

第1に確認しておかなければならないことは、デューイにとって「科学」は、既成の教会神学に代わって、産業社会にふさわしい新たな精神統合の原理を提供するものとして捉えられていることである。近代諸科学の発展と社会の産業化によって伝統的な宗教教義が解体されていくことは、一面では人間理性の解放・自立を意味するとともに、他面ではこの解放された人間理性がキリスト教

信仰に代わる人々の新たな精神的拠り所を神に依拠することなく自力で提供することができるのかという問題を引き起こす。デューイはこの問題に肯定的に答えようとしたのである。

その結果として、第2に、デューイにおいては、科学は単なる事実認識ではなく、人々の行為の一つの理念の実現に向けて組織するための価値探究の営みとなり、科学はそれ自体、道徳的性格をもつものとなる。そして、科学のこのような捉えかたには一つの認識論批判が介在しており、それがいわゆる「道具主義論理」の着想に結びついている。

本稿では、前者の論点について、ミシガン後期にデューイがいくつかの宗教関係の専門雑誌に寄稿した諸論稿を手掛りに考察し、後者の論点については、同じくミシガン後期にデューイが発表した一連の論理学関係の論文を中心に考察する。

1 科学信仰と社会的知性

ペシミズムの問題 デューイは、クリスチャン・ユニオン誌の1889年7月11日号に「現代フランス文学の教訓」と題する論文を発表した。⁶⁾ これは、もっぱらフランスの文芸批評家ブージョ (Bourget) の『現代心理学論集』を紹介したものであるが、この論文でデューイは、ブージョの分析に拠りながら、現代フランス文学の著名な作家たちに共通して見られるペシミズムの気分を取り上げ、ペシミズムは「信仰の欠如」がもたらす「現代思想の精神的破綻」の姿を表していると指摘した。ここで問題にされているペシミズムは、人生に希望や理想を抱いて努力する生き方への「吐き気」、人生を「徹底的に空しいもの」と見なす信条を意味しており、総じてそれは19世紀末フランス知識人のアノミーな精神状況を指している。

デューイは、ブージョに拠りながら、ペシミズムの思想的表現としてディレッタンティズム、自然科学の物理的決定論、ロマン主義の三つを取り上げている。ディレッタンティズムは、あらゆる真理に次々と身を任せながら、どの一つにも自己を投入することができず、絶対的価値の存在を否定して、あらゆるものに相対的価値を認めるが、結局は自らの責任ある意志決定、道徳的選択を回避する精神の態度を表している。自然科学の物理的決定論は、人生も、物質現象と同様に、因果関係の必然性によって決定された一連の出来事にすぎないと捉え、そこには人間の理想や希望、努力といったものが入る余地はないとする。さらに、ロマン主義は、感情 (feeling) の自由な表現、熱情 (passion) の高まりに人生の価値を認め、日常世界の形式、伝統、規則への反逆を試みるが、結局は感傷的な現実逃避に終わる。

デューイが「フランス文学の教訓」としてペシミズムを問題にするのは、まさにそれが、伝統的な価値規範の崩壊によって生じた一つの精神状態を表しているからである。人々は自己を全体として包括的に統合するような理想への献身を見失い、人生に意味を見出すことができなくなっている。ペシミズムは「理想主義の崩壊」であり、「精神的諸事物の至上性への信仰の欠如」を示している。かくして、デューイは「信仰なしにはあなたは何事も為しえない、あなたは何ものでもない」とい

うブージョの言葉を、ペシミズムへのメッセージとして引用する。もちろん、ここでデューイが言う「信仰」は、既成のキリスト教の教義やドグマへの盲目的な信仰ではない。デューイがペシミズムに対置するのは「意志の道徳的選択」であり、人間が神に依拠することなく自ら理想を選択する「パーソナリティーの自由な運動」である。それは、物質的な現実世界の中であって確固とした「精神的実在」(spiritual reality)を掌握する人間自身の能力へのデューイ自身の信仰を意味している。

詩と真実 デューイは「フランス文学の教訓」の末尾で、「19世紀の問題は信仰とペシミズムの間の選択に帰着する」と述べている。「信仰とペシミズム」を19世紀の問題として捉える彼の問題意識は、翌年(1890年)にスミス・カレッジの卒業式で行った「詩と哲学」と題する記念講演にも示されている。⁷⁾ ここでもデューイの関心は「現代の不可知論、疑念、ペシミズム」の問題に置かれており、この時代精神が詩という一つの文学表現の中にどのような姿をとって現れているかを分析している。そして、具体的にはマシュー・アーノルド(Matthew Arnold)とロバート・ブローニン(Robert Browning)の二人の詩人を取り上げて比較し、前者の詩に見られる信仰の喪失とメランコリーの響き、後者の詩に見られる快活な信仰と希望の表現を指摘している。

デューイはまず、アーノルドにとって詩は、価値喪失の時代状況の中で、人々に新たな精神の拠り所を提供しうる唯一のものだとされている点を指摘している。

「統合を欠いた知性と崩壊した権威の世界であって、アーノルドは、人々が慰め、拠り所、人生の解釈を求めてますます詩に向かいつつあることを見る。一貫した社会的信仰や秩序はもはや存在しない。価値があって確実で、しかも同時に知性に対して忠実で、情動にとって価値がある、そのような生活の理論がもはや可能であるのかどうか疑わしい。けれどもまた、権威と教示(instruction)への人々の要求も存在する。われわれは科学は確実だと言うかもしれない。しかし、科学は共感、慰め、人間性(humanity)を欠いている。科学は教示が最も求められているところで——生活の秩序化において——教示を与えない。かつてこうしたことの全てを与えたもの[宗教]は、アーノルドが言うには、真理としてその支配力を失った。それは、もはやわれわれにとって確証されたものには思われない。現在の状況の困難は、一方で真実なもの[科学]はわれわれを鼓舞せず助けない、他方でかつて拠り所と解釈を与えたもの[宗教]はもはや真実ではないという点にある。詩の中に、人々は生活の広範な解釈を、生活についての高貴な諸観念を、そしてまた生活を彩る全ての気分とその全ての運動の諸側面に対するある種の共感を見出す。研ぎ澄まされた感情、広範な共感、高貴な諸観念、真剣な情動はそこに見出される。それ以上われわれは何を求めるとか。われわれの時代の困難において、指針(guidance)を求めて詩に向かうこと以上に自然なことがあるだろうか。詩はますますわれわれの宗教とわれわれの哲学になりつつあると信じてよいであろう。」⁸⁾

デューイは、このようなアーノルドの主張に対して一つの批判を試みる。すなわち、詩は確かにアーノルドが言うように、人々に「人生についての純粹で役に立つ解釈」を伝え、「人生における価値あるもの、永続的なものについての感覚」を深める力をもっている。だが、詩がそのような「高

い召命」(high calling)を果たすことができるのは、詩が人生についての「リアリティー」「真実」を捉え、それを人々の想像力や共感に訴えるような形で表現するからである。詩にリアリティーがなく、人生についての真理が含まれていなければ、詩は単なる言葉の虚構、わざとらしい感傷に墮してしまう。

「拠り所を与え慰めを与える詩の偉大な力——アーノルドにせよ他のいかなる批評家にせよ、みじんも誇張することのできない力——は、まさに真理のゆえであり、詩がわれわれに与える諸事象についてのリアリティーのゆえである。……詩がわれわれを支える力を持ち、われわれを奮い立たせる共感力をもつのは、われわれの日常生活の因習と見せかけのただ中で、詩がわれわれの日常生活の真髓と中核に存する黄金のようなものをわれわれのもとに光り輝かせるからである。」⁹⁾

だが、詩が人々に教示する人生の真理は、「知性」によって確証された真理でなければならないとデューイは言う。

「知性に対して真実でないものが、いかにして想像力や情動に対して真実でありうるのか、私には理解できない。」¹⁰⁾

かくしてデューイは、科学をさげすみ、哲学を嘲笑して、唯一詩のみが人々に人生の慰め、拠り所、解釈を提供できるとするアーノルドの主張を批判する。なぜなら、科学は現実世界の諸事実を通して真理を探究する人間知性の働きを意味し、哲学は現実世界の諸事実が人間経験に対してもつ意味を探究する人間知性の働きを意味しているからである。そのような「真理を知ろうとし、経験の意味を把握しようとする」人間知性の働きから切り離されるならば、詩はその純粹さと靈力を保持することはできない。

デューイにとって詩は、人生の真理を伝達する一つの特別な表現手段である。だが、人生の真理そのものを探究し明らかにするのは、冷徹な人間知性の働きであり、科学と哲学の使命であるとデューイは言う。「結局のところ、科学は唯一の知識を意味する——哲学は唯一の知恵の愛であり、われわれのこの経験の意味に達する唯一の試みである。」¹¹⁾ こう述べたうえで、デューイは詩と科学・哲学との関係を次のように説明する。

「天文学者は、流星が凍った岩であること、宇宙空間の凍った真空と同じくらい冷たいものであること、それは地球の大気に触れて溶解し、星のように輝くものであることをわれわれに教えている。私は、詩についてもそのように考える。科学の、哲学の味もそっけもない厳格な暗黒の諸事実は、人格(personality)の大気、人間魂の希望や恐怖の中を通過して照らし出され輝きを発する。事実の基礎なくしては、科学によって確証された事実の基礎なくしては、われわれの光りは人を迷わせる鬼火であり、よどんだ沼地に出没する炎である。一言で言えば、批判し確証する科学と哲学の可能性がそこになければならない。詩人は、実際、予言者であり、制作者である。しかし、もし彼らが制作するものが実質をもち重みをもつものであるならば、もし彼らが予見するものが影以上のものであるならば、詩人は彼らの周囲の生活の意味を示さ

なければならず、それを高度な完全さへと高めなければならない。詩人は、あらゆるところで人間の知性に密接に関わる諸条件から自由であることはできない。」(傍点筆者)¹²

同様に、詩と科学・哲学の関係を次のようにも説明している。

「今や科学と哲学は、形式と方法においてどんなにテクニカルで迂遠なものに見えようとも、この同じ日常世界との親交 (communing) における一つの自己同一的精神 (one selfsame spirit) の働きである。そして、もし訴えの直接性と普遍性、外観の豊かさと熱情において利点が詩の側にあるとすれば、結局われわれは、方法と基準の側面に関する利点は科学と哲学の側にあるということ思い起こそう。」(傍点筆者)¹³

要するに詩は、人間知性が科学と哲学を通して捉える人生についての「灰色に塗り込められた」理論を、パーソナルで情動的な力をもった真理として伝達する表現手段だということである。

かくして、価値喪失とペシミズムの時代状況の中で、デューイは、確固とした人間精神の拠り所を、日常世界のリアリティーの中から人生の真理を把握する人間自身の知性の働きに求めるのである。

「私は、真理を知ろうとし、経験の意味を把握しようとする [人間知性の] 試みは、行為から、人生の理想と熱望から懸け離れたものだとは思わない。」¹⁴

結局のところ、詩人は人生について自らの解釈、諸観念を彼の時代の知性から引き出されなければならないとデューイは言う。

「生活は、詩人が自ら直接的に適用するところの生の未加工の素材ではない。生活が詩人のところにやって来るとき、生活は既に様々な意味、様々な解釈の宇宙となっているのであり、実際、詩人はそれらを膨らますことはできるであろうが、それらなしではやっていけない。良きにつけ悪しきにつけ、幾世紀にもわたる反省的な思考 [知性] は生活を解釈してきたのであり、それらの解釈は詩人が為すであろうことに対して基礎であり続け、道具を提供する。彼は単に科学者と哲学者の労作の結果を吸収し利用するだけであろう。」¹⁵

言い換えれば、詩人が人々に与える人生についての解釈、諸観念は、知性にとって証明可能なものでなければならず、「知識のシステムとしての科学」および「経験の意味についての言説としての哲学」において確証された「真理」でなければならないということである。

人間の二重の孤独 以上のような観点から、デューイはアーノルドの詩がどのような「人生の解釈」を教示しているか、そしてそれにはどのような「哲学の論証」が内包されているかを分析する。ここでデューイは再び、アーノルドに見られる「喪失感」「憂いに沈んだ哀惜の念」を指摘する。

「実際、近代の詩人の中でのアーノルドの傑出した特徴は、彼が喪失感を声にするときの憂鬱の美しさである。古い信仰と理想の死滅をふり返って一瞥するときの彼の悲哀である。歓喜の泉は涸れて、ただ歓喜の記憶を抱いているその姿である。新しい歓喜、新しい信仰の夜明けへの形なく望みのない希望である。」¹⁶

だが、アーノルドの詩に見られるこうした「哀惜の念」は、より根本的には、彼が人間存在の根底に「自然からの孤独」と「仲間の人間からの孤独」という「人間の二重の孤独」を見ていることか

